

# 人権作文代表作品

12月号の「人権標語」に続き、今月号では人権作文の代表作品を紹介しします。

## ぽかぽかことばを言われたら

青柳小学校二年 まつ本 なお

わたしは、ぽかぽかことばを言われたことがあります。二年生になってから、いえで、おかあさんとそうじをしたときのことです。そうじがおわったあと、おかあさんが、「お手つだいでしてくれて、ありがとう。」と言ってくれました。わたしは、それをきいて、うれしくなりました。おかあさんが、おそうじをがんばっているのを見て、『すごいな。』と思っていたからです。わたしがお手つだいをすると、おかあさんはいつも「ありがとう。」と言ってくれます。そのとき、こころがぽかぽかしました。

ほかに、こころがぽかぽかすることばを言われたことがあります。わたしが、学校の校庭でころんだときです。ともだちが、「だいじょうぶ。」と言ってくれました。わたしは、ともだちのことをしんせつだな、と思いました。ともだちには、やさしさがあってすごいな、と思いました。ともだちは、わたしのことをたすけてくれました。わたしは、「だいじょうぶ。」と言われて、ともだちは、こんなことを

理しないでね。」家族や友達その一言にとても助けられた。温かい気持ちになった。それを感じてから、私は「ありがとう。」と感謝を伝えたり、相手の良いところを誉めたりすることが自然と多くなった。伝えている自分自身も温かい気持ちになった。まさしく「幸せの連鎖」だ。言葉は人にとつての救い、希望、支えとなり、それが広がって、みんなの幸せにもつながるのだ。

自然と心から出てくる他者に対する温かい言葉は人間関係を円滑にし、その幸せは自分へ返ってくる。しかし、もし苦しみの渦中において言葉を発する事さえできない人がいたら、それはとてつもなく悲しいことである。救いを求めることができないなら、周りも気付きにくい。まずはその本人が勇気をふりしぼって言葉を発することが大事だと思う。そしてそれと同時に、その言葉を受けとめた人は、込められた想いを想像することが必要だと思う。

言葉は、単なる文字の羅列だけれど、そこに人の想いを宿す。自分の思いを相手に伝えることができる、大切なツールである。人を感動させたり、救ったり、生きる希望になることもあれば、深い深い傷をつくることだってある。だからこそ、自分の発する言葉に責任を持ち、自分の分身だと思って大切にしていきたい。他者を幸せにさせる言葉を発する人になりたい。また、他者から受けとつた言葉に、色々な気付きや真実を見てとれる人になりたいと思う。これは、今社会問題となっているヤングケアラーや虐待、いじめなど、苦しむ人を救うことにもつながっていると思う。

「言葉」を発する自分自身の経験、知識を豊かにして、私の分身である言葉が誰かの幸せの種になってほしい。心のこもった言葉を発し、幸せの種をたくさんまくことができる人に、なりたいと思う。

してくれるんだな、やさしいんだな、と思いました。だから、わたしもころばないように気をつけようと思いました。こんど、ともだちがころんでしまったら、わたしがたすけてあげたいな、と思います。

わたしは、その子みたいに、ともだちにしんせつにしてすごしていきたいです。なかよくたのしく学校でべんきょうをしたいなと思いました。「ありがとう。」「どういたしまして。」「だいじょうぶ。」というぽかぽかことばをともだちにも、かぞくにも、言っただけたいです。ぽかぽかことばを、ほかにももつとたくさんさがして、つかってみたいです。

## 「言葉」を考える

神川中学校三年 奥原 彩日

言葉。これほど不思議な力をもったものはないのではないかと。他者の言葉によって、落ち込んだり、悲しくなったりした経験は誰もがあろう。私もその一人である。と同時に、自分の発した言葉が相手を傷つけてしまったかもしれないと反省することも多々ある。近年は、SNS上に書き込まれた心無い言葉によって自ら命を絶ってしまう人もいる。言葉は鋭く冷たい、「凶器」となる。何気ないその言葉が、人の心に無数の、消えない傷をつくってしまうのだ。

一方で、私が落ちこんで、辛かった時、その状態から救ってくれたのも「言葉」だった。「大丈夫?」「何かあったらいつでも言ってね。」「無

## その他の代表作品

(タイトル、作者名)

「ふつう」「いらい」と

神泉小学校三年 新井 拓真

思いやり

渡瀬小学校四年 田中 映人

ひいおばあちゃんと心の声

青柳小学校五年 櫻井 美咲

自分の個性

丹荘小学校六年 高岸 来羽

障がい者への差別をなくそう

神川中学校一年 清水 希美

ありがとう

神川中学校二年 関口 響夏